

カンナダ文字

児玉 望

カンナダ文字は、南方系のブラーフミー文字のうち、カンナダ語の話されているデカン高原西部カルナータカ地域で発展し、16世紀のヴィジャヤナガラ朝期までに現在に近い形となった文字です。東に隣接するテルグ文字とこの時期までほぼ平行して変化してきたものと見られ、活字体で見るとよく似ています。字母本体の上部の高さを揃える北インドの文字と異なり、手書き文字でも子音字の上部と下部の両方の高さをほぼ揃えて書くのが普通です。テルグ文字が母音記号を上へ伸ばすのに対し、カンナダ文字の母音記号は右側に伸ばされるため、横長の字母が多くなります。また、北インドの文字と異なり、結合子音字母がなく、連続する子音を表すための子音記号が、字母本体の下側に、離して書かれます。

カンナダ文字を使用する主な言語は、カルナータカ州の公用語であるカンナダ語(約3000万人)、同州南西部のコダグ語とトゥル語です。また、トゥル語地域では、ゴアからの移民の話すコンカニ語も、カンナダ文字を用いて書かれてきました。しかし、ゴア州の公用語が「デーヴァナーガリー文字で表記されたコンカニ語」と定められたため、デーヴァナーガリー文字を使用することも増えています。伝統的には、サンスクリットもカンナダ文字で表記されました。デーヴァナーガリー文字と一対一に対応する字母や記号があり、サンスクリットの表記には差し支えがありません。このためカンナダ語の正書法では、サンスクリットからの借用語がそのままの綴り字で多用され、発音も、本来カンナダ語に存在しなかった音も含め、なるべく原音に忠実であるべきだとされています。いっぽう、カンナダ語の表記のために追加された字母は、母音 e, o の長短の区別など、わずかです。トゥル語では、トゥル語固有の母音を表記するため、新たに母音記号の組み合わせが採用されています。

字形の中で特徴的なのは、タレカトゥと呼ばれる字母上部の一画で、起源は北インドの文字上部にひかれる線と同じです。この線は、本来は字母の縦画と、上部につく母音記号を隔てる役割をもっていたと見られますが、タレカトゥはその歴史を反映して、本来縦画のなかった字母にはつきません。また、上部につく子音記号とは融合してしまいます。また、原則として母音記号は子音記号に続けて書かれ、子音字母と母音記号のつながり具合が母音記号の区別にとって重要です。

下にあげる例は、カンナダ語の挨拶の言葉です。

ನಮಸ್ಕಾರ
na ma skā ra

skā は、sā と、k を表す子音記号の組み合わせで表します。母音記号 ā が上部についているため、タレカトゥがありません。子音字母 sa には、上部の母音記号を字母から離して書きますが、つながり具合による区別を保つため、まず小さな円を書き、これに続けて母音記号を伸ばします。インド数字に起源をもつカンナダ数字は、一部の図書のページ表記などに用いられています。

[参考文献]

- 中西 亮「カンナダ文字」、『世界の文字』、みずうみ書房、pp.40 - 41, 1990.

(町田和彦編著『華麗なるインド系文字』白水社 2001, pp. 192-193 より転載)